亀か岡

863
152

国立国会図書館　タイトル『亀か岡』　請求記号 863-152

ガラス使用

863—152

序

何世無詩士以心詩為質也何處
無山川風景因人美也中畧
聞讀芭蕉翁國分山幻住庵記
復と誦すこと七部集可毋出為
此文章に侍るかく所謂詩為詩後
迄も深く淋比林崇れの言葉を志

国立国会図書館　タイトル『亀か岡』　請求記号 863-152
ガラス使用

たえ申されし宝寂々として其性不
乃窮まり流る高雲洋洋として萬乃芳
麻ぶかく酬恩庵二の迹仕へて尚
年経て深き後みそ近化し給ひ
たるを風十哲が一家を敷宗丈
艸禅師物故られ以還一百余十
年のまさむを移して彼宗居
佛幻庵も破壊し哀いふつゝに

當の業 翁乃梅とは云ふかく哉于
今ちかさき後ここ世に不朽の英名
存せし乃残筆傳る 好士篤く尊
ミ於ひ常流寳訪ふ人勝を以心
懐ふ為の風景 因人の来りもし也
櫻見え續きはれつのしたる限あし
志るらみてを毎如月を是の
萬仲春 現住 碌山叟直有

近稿の法運を学ぶ古躰ハ華
藻を掛ぬ事能く所物稀も
こゝろに行る蕉翁其風調の
科まり栄えく洋洲の高深
ある事ろうらい必竟此様の意
修知識の正眼ありて取捨る人
覚悟道と須く幻化仍世界露
泡の身ぞ寸ろ往き鼻息ヲ過

此書湖南の林丘唯いまて
因此乃ほろしに業まるあたう
事ならぬなるへしや

嘉永六年
癸丑春
雀文
老衲

百五十回忌追善俳諧

脇起

木枕の垢や伊吹に残る雪　丈草禅師

湖より晴て風光るあさ　碩山

畑打れおこ語ふ梅をいふらん　梅通

脱捨てある蓑有東る也　五成

飯据も車路有る大家内　米友

見んな作子をたりる寄若菜　東英

かんのりと此紡室に月凄て　董廸
家も在る借りゆる石炭　陶年
末枯の道を十里乃通しける　拾玉
辛敷咲時こむ垣のましく　巨松
分かれ京といふを名のこれ枯に不　光尭
鍵羽織を人乃揺きれ　真枕
ともしこそ田植の留れ申ぶり　玉壺
蔦見るやしぶ風の浅漬　歎清

あさしとも喚声ふつすゐ徨ひ　月詩
葉ちり掃ふ水引の築　拾山
氣のおける院主の留主を月見して　丈輝
夜寒さを告る格子木乃音　素尺
市へ出にまては浅き茸　禾明
御説のかりた松まる　我荏
折て来さ花をおそれ迚ひ深　淡節
いとゝ身老きあけの竜　来二

挟遊に動く蚕此これれ蛭　蕉池

酒気色も紅きゝ茄子　朱惠

持茶にハ何そよいことやあハせ　石堂

豹のうへゝ露ハす吹から　白月

ちりくと木の葉も浴て涅佛　泥中

晴て涼き枝うの園　来仙

漆におく舞に眼隠をとり出して　馬原

日盛て出し来剃のてりつき　元亀

帆柱を伏せて留あつかり舟　玉晴

菓をさるうちに相登まる　霞良

へ紐く出り一座さりけ皇　西吾

縦て乾く帽かとまらぬ　英法

高下路の月にあるハす遠出行　柳高

根をたて茎葉乃競ふ蔓先　花渓

轉りて結ひきぬ花の雛　枝雲

余寒此陰を嶺すゑ稼子　辰丸

一夜で冥ふさ池の竹をかけ　通六
ちらりとあて光る珠数粒　堇丈
上総より匠を地ふ子を誘りて　呑石
歯もたゝぬ太と豆を責つめる　魚賓
清貧に黎葉の昔桑ふ花　也岐
菜芽し杞庵乃かいもい　執筆

果翁法師十七回忌

追福一折

苔むして堇花さく巌かな　果翁仏
水引来て鉢に味のあまりけり　追之
木地婚礼破れ屋の気配も那し　蘇山
つれ達ふ顔を古いちゝつき　呑石
夏の月畑け耕理乃小酒盛　玉桃
退けても這入る窓の草葉　泥中

勇ましく中仙道乃人通り　霞衣
から蕎麦の絵半鳴る　玉蓮
平生に又歩門乃幕を張　巨松
春待桜この花くさぬ　木二
え経の結のきハ方の新法事　歌涛
生く出金り法名こしく報　陶年
漣にゆらるゝ月のやるせなさ　米友
笠着て脱りまはる縄子　魚宮

易らくと長い御膳の秋祭り　馬泉
又利の恋い念を借出し　玉脂
植ゑし此律着ま花のまもる能　芝逸
彼岸の入日皆おくむて涙　拾呂

正風宗法を一字一石の法花経を
書写して釈経者の加くなりをおさめ
たまふ又草稗法も是をもとにして
利銘の忌作初秋乃四地に示此石

ありしのちさき玉窓けなきちやく
小石をあつめ指南のひなくに筆をそめ
て翁塚の基にたてあけ置しを
去年此日五十年忌の十七回忌に
当りつれハあのく此句碑を拾ひ出し
かなる冊子を綴りて法筵のちなみとす
加ゆみさる慕ふ者ともを発起して
建しむれハまたいとほしけれやちまよ

碩山

各手向発句略之

芳しやそれ絶らぬこの花の花　アハ 素尺

花まちて沙汰なし何をか手向草　京 拝恩

取らぬ人の莫し花の中　〃 石室

志賀の窓ふとき白い法の庭　〃 理在

照りし十雪ものと消ゆなん八重かすみ　〃 柳斎

そも根葉此芳し就りの思　〃 太翠

降るの松るに似かよう春の雨　イセ 芳菊

眼のおよ陽炎高し墓处　雀叟

色香なきすくろ芝もまんれ　釆友

散りて丈ある草をちりけり　陶年

うるはしき昔の色や花菫　歌濤

梅の月一あし毎にかはりけり　花渓

陽炎や鳥もかゝやく墨の筆　芝逸

春の部

曇りきる初夕や畑になく鳶　十二八 林旨

草の戸やもらひ合せし福寿草　、松窓

烏帽子岩波もかくれぬかすみ　、鷺宿

菜塚のちりより出づり春の水　、蝶兄

めうつりに若菜のみける鶯かな　、只斎

春もくやるのきさく雲雀かな　アハ 涼枝

急ぎまて通ひ乗れてやむし此声　松丈

ぬくゝ戸蛍ひゝきて暮れ春　エト　為山

薮入や行燈ひとつを供しける　、春挙

この鳥も鳴くや聲よりゆる年　、山子

初花や為う見さあれもとかしき　、祖心

花入をもとめて待れ春うら　ヲハリ　梧水

軽さとはふや春しけの村めめ　、春松

いねつむや寺を鶯をゆるう　テハ　梧泉

咲雲や椿の花も咲あした　、素山

おのつから書の名し蕪れとり　、保之

汐浪や煙りついて梅かし　、河曉

丈草頌詩の家五十を家とこそとき雅ふ寺作の
およく正常れはて善しめるも寺ともへし

炷もの、鳥ええの消むや鮑の花　、咏風

鶯や雲の作吹を夢のさむ　寺ら　杜水

雀子や飛出てを菜をさす声　武昌　湘月

月華乃賞き八十八夜う寺　、東雲

居さ人をえり合して二日灸　下サ　森逢

おもしろさ此梅りや手かゝま　イセ 抱言

梅ちるや見上る坂の風さむし　、徐水

煙らせて鳥も立なり松の花　、吹鯨

鶯や鉈焼の尻もまねり　、柳鳩

春さむし森乃鳩のこゑこもれ　、雲竹

本来を見くれ此中の春此な　、つまを

春惜む鉈や坊山乃花とつき　、積水

生木焚烟りもつむ春ゟ今　カイ 雷石

吹つけし雲も氣色やかさり炭　カヽ 晴江

菊ちや庭り来る身上り　、柴流

咲りもつ根水も深くて遠柳　、大島

咲くれて世をしのばれる藪の梅　エチゼン 令兆

浜松の霞まで見ゆるかまくら　、士能

波寄る小窓のうちや月と梅　エツ中 嵐歌

山焼や眺てまつりな跡見ゆる　、思八

藪の葉や梅さえ咲えも有さ霞　下ツケ 冬雪

降したまけりなや若菜つゝ　イタミ 稲人

池もちて了よ戸乃余波なる　、柳雄

柳乃灯の見ゆる宿や去年今年　、杖乎

折ゝむ風おて乃く柳かな　、曲阜

花の香乃簾透引とる来客哉　、太乙

暁乃星見て去りぬ猫の恋　サヌキ 第河

急雨や宮送る灯了り鳴雉　、芳山

新茶もおさなけの形き鮭かな　トサ 婦朱

低い田へ下りて鶉啼かゝつかな　アキ 利香

嫁の世と来て旅かしもゝの花　、為菜

三井寺にて

鶯やなるさはくれ声の中　、菜陵

老翁や花のちりしを借もせん　エチコ ちうら

連翁や人手かゝる枝砥り　糸 冷臣

黄鳥れ打渡越るや沼の際　、岡翠

梅ゝ香や明れハ家も見ゆる時　、糸魚

国立国会図書館　タイトル『亀か岡』　請求記号 863-152
ガラス使用

香はしき障子の皺やけさの春　、京 雲阿
咲もよひさやかつけて梅もらひ　、碩水
沛降や鴫の啼りもさめぬおと　、五言
打よせる浪の傍より春の風　、朗凡
さけれと緑をぬ声やもろ鶯　、春兄
初空や枝も梢もゆきの花　、禾明
京立て奈良の海やまれ月　、杜蘂
藪をよきりのそ英多梅の糸　、芹舎

表さ松もかすみへかくれて花さくや　、茅跡
鶯ゐて合点のゆきし余寒かな　、梅通
几ゆらるる月をここちよし旅衣　、番石（クラマ）
折ふりを先の笑ひけり和暦　、山嶽雄
ひきさまと力のいらん小松虫　、松花
芒の芽もよこれて出さり水の泡　、柳者
菜畑や大雨毎しき葉乃匂ひ　、仙季
見失ふて朝月おかむ雲雀かふ　、之建

ちる花や去る晴し絵乃空　ヽ嵐后

並の宮たゝり添り出る乃面　ヽ芝波

人家のましてハぬるむ小川哉　ヽ素竹

まさ碑のあるに眼をあて朧月　ヽ西笠

あらし待舟の餅や春の月　ヽ欣高

おもふ器ゆ月も居りて去れ空　ヽ东茂

梅ひらつこちらも花の林かな　ヽ鷗旗

築山乃盡てし肥をり蔵の墓　ヽうつ我

茎のみれすたりるや蔵のとう　ヽ栄人

小雨すら晴りさへふる春れ哉　ヽ芝園

そよくと吹松風やまつかすし　ヽ元亀

水まさへ香をもつ梅れ山路哉　ヽ東二

湧き水の湯気を欲られやあささ哉　ヽ拾三

松くるめ伐て底るや蔵乃花　ヽ芝桃

先住栗富と亡父九富との中八互に葉をを

隔てありて出来合の弔盃供る孫をふくらし孫

たゝんと瑯山子と予も先代々篁しく交侍れハ
ありく杖をえかハして仙境の楽しミをなす

砕て来て起て日長き峠かな　ゝ　馬泉

杉頭と見ゆるところハある梅かな　　瑯山

さくらてもよき春乃野堂　ゝ　指雲

印舗の泡ふくあとに池なれて　ゝ

巌し隣つく統の長剣　　山

商ひも仲乃同士乃月ハ女　ゝ

根ふまで似る花王寫薬　　雲

雲雀も去なぬ人乃流る哉　ゝ

日毎に見舞ふ医者のきん氣さ　　山

大勢ヶ化粧帰て済む釜焚て　ゝ

風ヶ吹てもしくく主翠　　雲

波所ふく塊とり請のかけまハて　ゝ

うしこき係ハ枯荒す寺　　山

月影にうきれど眼のつく獨る石　、
松虫捨てゝ跡ならしおく　雪
余そとふさ扇もわすれうち　、
年織の金れ遠入る古貨　山
咲花にいりまの食を又遣され　、
おもはぬ旅ておきまふむ　雪
水滲抗も打ちらし役干時　、
保命酒をひくとまめる　山

木そくとは枝おいたく能役者　、
灰吹そうりいつも気き　雪
角ふもにはとかまき為ん　、
減ると寒ふ水あふらはふ　山
隣所る宝炭気山の多あるし　、
第一のさたにすまふ条居　雪
主てぬる人にハ志きぬ地震し　、
唐土窮からふ逃し気遣　山

旅まくれは花のちくに月隠て　、

ふさりしてある露砂子芽をふく　雪

尾花て旅す昔絵の無扇　、

小佐の多き町のさしく　山

神佐に涤て華を咲す深る　、

かさなりあふて亀は甲干る　雪

露色は雨織川たつ花螢　、

夏のしおりしともす戸障子　山

冬の部

冬哀久あはれしきさるこうな　旦末

散きしたりの跡る梅かな　、常陸

潜出す海まちあはする文をかな　、後甫

網の目は包て喰とむ紙子かな　、己巴

水にのく隆るえてかかれてさく　梅麿

新室そそろ身ふて冬は月　、踈水

風志のく梅ひ香し卯の今　、梅園女

子乙め比氣子知里星体に时　、ハリマ 雲村
ふと出て笛にをし鳥り蓮　、如年
咲吹て子月為清しあハ怒急　、吾雲
梅さう飛雲の中し夜の海　、旅兄
音らう立と思れハ子月咲　、松岩
夕暮やて気のつましまの妖　、英山
まて熊ふ清水にさもやるの笹　、セツ 桃鳩
片ましへ嶋押さて銀草　、空水

粉あハきを蓋れ粉子乃髪さ哉　、呂玉
そ延く菜のさハ立て松萬　、梅雄
夜籠や飲く延ル漆の紋　、碧花
寺匠す波のゆらりや去ましし　、古極
咲柱わられも子肉なくそ水　、孝月
人滅てよし月出り納涼哉　、日彩
本心のよきに染られす浮笑情　、トサ 小鳩
雨笠の手や菜木乃夜比為　ヨク 遜阿

きまれ掛て落る水の音　アハ 四凡
年寄れ見れハ眼にたつ袷かな　友蕉
芥子捨て眼目もふらん風色　白月
きくと山も四月の夜明かな　湖仙
急きさまれ縫し更衣　倍お 松葉
色よきを盛見るま青茄子かな　晋水
松風やふつと眼乃はく清水口　玖宇
山越の月まねき出る雲羽かな　迫了

涼しさや水呑出行草の中　アキ 義世女
葉から葉へ走りし音や柏の露　鳳丘
瀬明りの木の間に見て五月やミ　柳塘
湯仕舞は体元の長き暑かな　飛名
雲の行方に白鷺枝かハつ　依山
志たくろき子すち鳥や五月雨　ヲノミチ 之海
登山は花り橋るや橋の上　之笑
涼しくて来られぬ山や時鳥　芦水

井水やまくらに軽く石の音　越中 大[?]
峰ふかく包を解ての若葉かな　カヽ 味[?]
草あまる吟声しづか松原　〃 林坡
清水の[?]おちてちてや[?]の手　〃 雲朗
杯かけて気の[?]し紙帳かな　チクセン 守遊
萬よの戸も家無に濡れず紙幟　[?]水 みやと
皆居して[?]風待や雲の峰　イセ 杞柳
菫[?]桜は風待日あり菅[?]山　イヨ 蘿[?]

高き木や二葉あまりし此若楓　十二八 影左
孑孑此機嫌やさ々能の保晴　京 玉成
斧ならぬ山のしゝみやほとゝきす　〃 文海
湯上りは身をさしよする窓の糸　エト 逸洲
夕月や雲除もしてたかむしろ　〃 [?]涯
小百合のかをりや山の深き知る　〃 竜村
みしらぬの[?]に絶し言のあと　〃 [?]流
掬手や[?]の手を漏れて[?]扇　〃 西馬

国立国会図書館　タイトル『亀か岡』　請求記号 863-152
ガラス使用

衾紙かれまよひに秋てなら給　李岱
蔓草の一夜に近て有明　芝石
知らしの志てや時雨　玉菴
信濃なる八松山まへや遠菜　磯山
湖水に浩る鶴のひとあり　よね女
涼しさ花に休らふ草外て　太乙
雜しうたゐの膝へ出されぬ　山
曇りむかとれ湯さむ月の西　米
机ありあまる一西仇兒行　乙
東坡人に蜀涙をわらふを伐れる　山
戸紙の張をに年可射掃掃　米
を更まで来て逢れぬ二年越　乙
痛うしみけるに髪根むらん　山
ゆうむさとおもふささに雪に来　米
波より静まる高砂の沖　乙

月代に篭の兎かへ行雲へやら　山
そよ煙草も負ふ吹こうら　米
大寺も時めく秋の寂しさよ　乙
槌につかれてむかひまん斧く　山
許りねハ心に足らぬ兎の雲　米
棄てゝゐる虫を起すに似る様　乙
永きかに気からぬ旅の賑ふ時　山
ゆふ夜の夢を捨ぬなる　米

気のきやい半まもつひに砕けれ　乙
便あれ袈裟に衣の示す志　山
玉垣のあふひに亀の甲干て　米
老ても寂乃透ぬ米盤木　乙
吹立て繕ひきえて香霧変　山
毛剃像とる蹊のあつらひ　米
染るはのよろしも拂ひ下手手　乙
中稲赤らむ西山乃月　山

化けの煙横たふ霞に　呆
借りしぬいて豆鼓をと待　乙
三人の自慢出て果もなし　山
抱て肩をこすれ黒猫　呆
花の香てつれて旋りも舞上り　乙
水さへなしに蕗姑がれ淑　山
茶支払余所に猪の跳し跳子　呆
春裏深く弱き園し　乙

秋の部

立秋やあつさハ去り　（ヲノミチ）東耕
しとしと太鼓ふりつれて崩れ気　惟寓
月のなきに雪もあつまる九月哉　子峰
おらへハ山にひいなて秋の暮　十栖
芦やさらふるふの毎と昔　（サヌキ）木長
松の声さりてまつめて下り築　（イヨ）其嵐
炭束や紅葉かけて掃戻り　（キイ）呆邨

清水に草葉萩までうされ秋　アハチ　蜀丁
何気なう夢驚や初嵐　、　暁香
哀れさや菊に寄りて虫の声　、　木圭
それ鳥く空なれたさや天の川　、　菫池
二夜出て数見知らぬ野分かな　雪峰
草なりて寄れ見らし戸口かな　十二ハ　不角
清川や離さ格子こうく一葉　ハリて　梅園
秋しきれつるや古きは草の香　、　笠村

稲る月まさに絶ゝ柴　漆　カヽ　木圭
一日乃こなれ日和や九月尽　エツ中　卜か
夕立の尾花々とくき来かな　、　卓猩
稚とりしれちも蕎麦咲てけり　、　烟文
鳴近に声人の待されて小町の森　、　逸石
あちらむく人影さびし後の月　、　依山
盆の夜やいつうなれ見ゝ筆頭　フシミ　岳風
淋しされ足らて枝足す芭うか　イセ　尓豊

かさね着も霧けく来りぬそゝる月　ヲハリ 莫山

心とつられ遠さや丁の行きたし　、一清

採子の日にも見せん花木槿　オハリ 多代女

汲み来る夜も新らし秋の水　ヲキ 鷺巴

拾人のあるや支へり見ぬ一葉　、左夕

人訓もせぬや毎日添ふ鳥　、梅思

蹈みかけて何待つ垣そ秋の暮　、巨桃

余所にある砂さへ見て芒の穂　、雲葉

四ッ辻を伴ひてはや鈴かな　、霍居

廣庭やとり残されて菊の花　、耳古

底光りするまて天の川　アハ 左一

秋見し根もあらはなる川柳　エト 白芸

稲妻に歩行よくさや足跡を　、いさ志

志の有し花葉の白ひや新の月　、茶古

かくれ家や垣根の花に菊の花　、見升

待宵や座敷ぬりし世は親かさね　とら 月谿

起されて裏葉見せけり萩の花　荃丈
山間や鳴子見とつゝ田一枚　蔦海
下露に来る蝶見つゝこなき萩　碌山
手のひらにとれ池に浮む月　素吟
新桶へ造酒杜氏の気を依て　山
借見の衣裳たゝむ声やか　吟

めつらしく御降ありし七ヶ日　山
舩うる凡ゆのくちる古挫節　吟
魚来る棚もとられて魚乃棚　山
用心して曳流し風邪　吟
おはてして嫁入の鍬と乱れ　山
ゆりもあ憂ふ鳴子比まる　吟
上嵯峨に釈迦をおいて春を待　山
蔵きらひの若捨哉し　吟

月よしと二本蒸汁を定めらん　山
吹まくる風の裏見せる葛　吟
お形し名の古襖乃懺達つゝね　山
すり人寄せれ居合ひとぬき　吟
店十行の丁稚も花は目見ゝして　山
杉葉通ひて光る手の飴　吟
雑木に春は小雪のやゝ溜り　ゝ
鳥の鳴うぬ真明淋しき　山

足もとに芝や蹈られし舞伎　吟
身極らして悪阻紛られ　山
若党知らぬ草を気儘に生茂り　吟
香もなくさうにおもふ紅乃根　山
膝入るは此家乃琵琶をて　吟
こと家の飯ゝ頃になくれる　山
ひよろくとまさ茄もつゐぬ生を的　吟
浅いさ流しを出さぬ利根川　山

国立国会図書館　タイトル『亀か岡』 請求記号 863-152
ガラス使用

宗論もしばらくやすむ盆の月　吟

天気いるみ此木槿ちゝうむ　山

扇おく野夏乃座敷家通り　吟

小倅たうりを犬も侮れぬ　山

御入部とて見てさゝめく絵本下　吟

つゝミし色のしほらしき花　山

麻苅ハ眼敏く鶏の下りる樹　吟

鷺寝けたる笠ぬけうちらしう　山

冬の部

冬しるる木の葉も消る行衛かな　一の大（ハリて）

皆降て仕舞ふ音する霙かな　尺西

枯芦やゆれる嵐てりめとき　吉故

凩や寒さめて見れハ身て冷し　一鳳

投網のつまりきあまる霙かな　柿玉

冬寂乃二度に勝る我が身　彩女（イタミ）

一筆冬に菊する日もたり年の暮　梅隠

皆おなし姿や雪の冬越松　　、竹舎（セツ）

井の底のぬけ滴も見ゆる寒さかな　　、卧亀（アキ）

風有り添ふ声のさえけき千鳥哉　　、玉臺

捩りなと静なる西や神の留守　　、木居

汲山に飛へとゝめや新ふなる　　、徂木

行留る雲に千鳥の啼夜かな　　、其城

火鉢に一二羽きろき千鳥かな　　、菜年

降そめて春の気もなき雪の西　　、一玉（ヲノミチ）

水仙や持る手のあたゝまり　　、香風

雪ふかう夜深く吹ぬ許なき　　、葉船

戸口まて叩て戻る小縁かな　　、一峰

木からしや寒さに老し丘の家　　、春水

生くさ花活らに軒の榾火かな　　、籠岱

松影を炎森に聳の雪ひかさ　　、桐富

年し後ろせり出て並ふ小鴨かな　　、荳舎

やきの堂降雪に足入にけり　　阮岳文　掌山

山吹の咲り甲斐ありなり花　ヲノミチ 蔵八子

出替りわたまし済て逢此鶯　アキ 池旌

旅なからゆたかに越ん年の坂　アハ 芳像

春月や雲の吹たつ松乃上　ワカサ 姫亨

水仙をまさほして並て菊ふみ　、柳枝

常盤木の鋒をかくれて降り花　、捨雲

翁忌や戸口に蓑を振る音　エチセン 竹雅

井をさらつけに忘る涼哉　、東林

松葉散るをりにこゝに庵哉　、舟暁

来て居ぬ旭のさしや大根蒔　カヽ 麓翠

芹来るや水音浮る竹筏　越中 郁翁

足あとも説法も残しゝ十三夜　、秀枝

残り此風呂着るにかへし花　、宜尓

米搗て煤ひのつくや藁庇　ヤマト 己蕉

降侭に流きもつ比る涼哉　ヲハリ 烏洋

くりまき夜のつけ八四もよ烏哉　、李嘆

国立国会図書館　タイトル『亀か岡』 請求記号 863-152
ガラス使用

あハ雪やむらさくしつゝの降力　吾心
日の入るたしこの朱りし室との為　尋香
古葉やてちる菜れかえしむ　京　也丞
短夜を出してさく菜華かな　路亭
倶利加羅や霧に尸のむせされ　月坡
炭の虫のなして淋しやうるのふ　烏谷
曲る墨窟むく硯も泳よこう成　清民
菜の花やうつらいて咲花の数　霍衣

獄の栖もあたゝめて退く𢶍火かな　呉山嶽
於琵琶にて
木ぶりしや岩にし宛なる水の音　玉脂
息笑ふ鞍指るや除夜の風呂　清水
とかなりと稲生の仏るや秋の露　碩山
雪となるよれの降るまゝ時雨　柳塘
枝の雀市ゝ果れハ地に下りて　山
やたてれ笑をちるしけり　塘

酒上をやめて月見のひとり旅　山
程の加減乃ちらふ掃時　境
蔦見して呼子鬼児の膳手　山
きした人歩て道了行おく　境
九品乃城を黒白了平泉寺　山
従り鶏の世にさ鶏声　境
出の道語追く紅葉了下地打　山
勝て乃中土産顔を見とめる　境

吹ぬいて花なき月の大手先　山
風呂云傳乃とゝく良し　境
抱礼毎の生季代りを惜むらん　山
猫をやるゝも先き探てする　境
流れ家も見てさ使さぬ花盛　山
まつたりとなる去向乃烟ふさたれ　境
て出をハ夜へりけての湖巡り　ゝ
長ゝ穢て了しむおそく行　山

国立国会図書館　タイトル『亀か岡』請求記号 863-152
ガラス使用

借て来し蛇の目ぬ傘ハ名のミて　培
まのうちつゝて鳩ハ何を啄　山
乞食めらて深し舩おろし　培
こ来二般りを月大根　山
色替てこを伝ふる霊のこゑ　培
おれらをあての宿川乃亀　山
砕跡るたけゝ埒実ぬまけし　培
字主から来て培も踏ゆく　山

猫とめぬ山乃中より細き月　培
その角の笠の葉散深つき　山
徐をみ見て果したる関ホ模　培
色むらさきりに入らぬ泯む　山
お飛し帯毎ゝかえるむすひ妻　培
こそをゆいたと春風ら吹　山
池の花筏りなれハ縁りてつく　培
ひとかさ中りハ菓をあまる後　山

国立国会図書館　タイトル『亀か岡』　請求記号 863-152
ガラス使用

おゝ子孫なみ集りて寿しけり

翁嫁にしたちも亀か岡に子ら居をもとめたれ

それより後翁寂(?)ましまして乃ち今もなほしく人残

りしものたりきん居をもとめて亀津の

跡を継ぎ八十とせあまり十四年忌の追善哉

いとなまれし時翁の来し方を記録(?)せんとを

乞(?)けるに老人しけるを先生宗斎居士この

十四回忌にあたれる追福歌を発句を催

やまもとり杯にのせて句に撰露(?)まで数

現ろう志を蔵し月も翁の名のりけり

但居なせる周縁にかゝりしもあらんは何集乃

末のりの端るのたつのり

嘉永七年この秋九月なかばしるす

和亀免道書

863
152

消印

14173

国立国会図書館　タイトル『亀か岡』 請求記号 863-152

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『亀か岡』 請求記号 863-152

ガラス使用